

公益財団法人 静 嘉 堂
平成 25 年度 事業計画書
自 平成 25 年 4 月 1 日 至 平成 26 年 3 月 31 日

1. 開館日数

文 庫 269 日（うち閲覧日数 219 日）
美術館 269 日（うち展示日数 165 日）

2. 展覧会

〈平成 25 年〉

「旅の文学—紀行文にみる旅のさまざま—」

4 月 13 日（土）～5 月 12 日（日）

〈26 日開催〉

非日常を体験する旅。人々は昔から旅を続けてきました。古くは『万葉集』に名歌を残している防人たちの、東国から九州への旅があります。公用の旅、商用の旅、寺社参詣、物見遊山など旅にはさまざまな目的がありますが、それらから生み出された紀行文には記録、創作を問わず、人々の特別な思いが籠められています。本展では、そのような“旅”に関わる本を、各地の名所記なども含めご紹介致します。

「せいかどう動物園—いきものをめぐるイマジネーション—」

5 月 25 日（土）～7 月 15 日（月・祝）

〈45 日開催〉

東洋美術に表わされた鳥獣・昆虫・魚介などの動物。動物が垣間見せるさまざまな姿は人々の想像をかきたて、そこには様々なイメージが与えられてきました。自然の力、豊穰など吉祥の象徴として、あるいは人間社会における寓意として…。中国の唐三彩をはじめとするやきものや金工品、日本の根付など、いきものの立体的な姿を写した工芸品を中心に、静嘉堂に棲む「いきもの」たちを紹介し、人々が動物の表現に込めた意味や思いをさぐっていきます。

〈主な出品作品〉：重美 三彩鴨形容器 唐時代・7～8 世紀、伊万里焼 染付雉子香合 江戸時代・17 世紀後半、仁清 白鷺香炉 江戸時代・17 世紀後半、原羊遊斎 秋草虫蒔絵印籠 江戸時代・19 世紀、石黒是美 花鳥図大小罫三所物 江戸時代・19 世紀

「幕末の探検家—松浦武四郎展—」

10月5日（土）～12月8日（日）

〈56日開催〉

「北方探検家」「北海道の名付け親」として有名な松浦武四郎（1818—1888）は、文政元年、伊勢国の郷土の家に生まれました。15歳の頃から日本全国、旅をして歩きましたが、特に北方に関心を持ち、弘化2年（1845）から嘉永2年（1849）、安政3年（1856）から同5年まで、東西・北蝦夷地、クナシリ、エトロフ島を探查。関連する多くの著書を刊行しました。その後、明治政府の命を受けて開拓使判官になるも1年で辞し、以後全国遊歴と著述の日々を送りました。このような旅の巨人武四郎はまた考古遺物の大コレクターとしても知られ、多くの友人知人と交流をもっていました。静嘉堂は、武四郎没後、そのコレクションの寄贈を受けました。今回、調査終了に伴い、コレクションより主要な物を選び、初公開致します。古墳時代の美しい玉、見事なヒスイの勾玉、また鎌倉時代の考古遺物など、歴史的に重要な資料となるものも含まれています。本展では、それらの考古遺物を中心に、幕末・明治に生きた特異な探検家、松浦武四郎の人物像を紹介してまいります。

〈平成26年〉

「描かれた風景—時空を超えた旅—」

〈38日開催〉

2月1日（土）～3月16日（日）

古来日本では、四季の移り変わりの中で自国の風景を愛で、多くの名所絵・風景図が描かれてきました。

本展では、堅田（滋賀県）を描いた室町時代の名品「堅田図旧襖絵」を7年ぶりに公開するとともに、富士山や六義園といった今でも実際に見ることのできる風景・庭園を描いた作品、歌川広重の浮世絵や名所図会などの版本もあわせて展示することにより、日本人が愛した風景の様相を探ります。

普段見慣れた景色やまだ見ぬ日本の風景がどのように描かれてきたのか…美術館で、時空を超えた旅をお楽しみください。

〈主な出品作品〉：「堅田図旧襖絵」 室町時代・16世紀

歌川広重「六十余州名所図会」江戸時代・19世紀

以上